

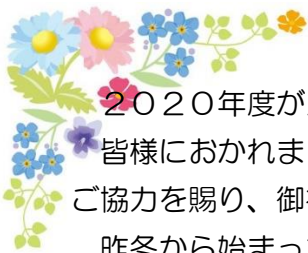
ふれあい通信

第14号 (令和2年9月発行)

- 発行：なかしべつ地域生活支援センター
- 連絡先：(Tel) 0153-73-3185 (FAX) 0153-72-8070
- 住所：標津郡中標津町東17条北9丁目4番地1
- メール：nakashibetsushienn@dofukuji.or.jp
- アドレス：http://www.dofukuji.or.jp/facilities/nakashibetsu_shien/

ごあいさつ

なかしべつ地域生活支援センター
所長 谷川 智生



2020年度がスタートして早半年が経過しようとしています。皆様におかれましては、日頃から当センターの事業運営にご理解・ご協力を賜り、御礼申し上げます。

昨冬から始まった新型コロナウイルス感染症の猛威は未だ収束の見通しがない状態が続いています。緊急事態宣言が解除された後も「安心」からは少し遠い心もちのまま過ごされている方が多いのではないのでしょうか。

多くの方が会するイベント等の開催が自粛となり、職員の外部研修も次々に中止や延期、内部研修もなかなか設定が難しく苦慮しているところです。また、利用者が楽しみにしていた各事業所の行事も自粛を余儀なくされ、町のお祭り等も早い段階で中止の報が届いていました。

ようやく平常に近い生活を送れるようにはなりましたが、感染の波が繰り返されることは避けられないとも言われています。まだまだ悩ましさは長く続きそうです。

「ウイルスとの共生」が話題とされています。私たちの暮らしぶりや仕事ぶりを変容していく努力も欠かせないのだと思われまます。リモートの会議を試したり、形の違う研修の検討を始めたところです。また、利用者の生活や支援のあり方はどうしていくべきか、これまで同様では通用しない部分をどのようにアレンジしていくのか、課題は山積しています。

今般のウイルスは、3つの恐怖を生み出しているとも言われます。一つはウイルスそのものの恐怖。一つはワクチンや特効薬の朗報がなかなか届かない未知への不安からの恐怖。そしてもう一つは、感染者や周囲に対する「差別」への恐怖です。

この「差別」は、福祉業界が遙か以前から悪戦苦闘しているそれと同様か、それ以上のものかもしれません。配慮されるべき対象者をさらに困らせてしまうような社会の一端を耳にする度、たいへん残念な気持ちにさせられてしまいます。そうした空気感を薄めていくことも我々の役割の一つに加わったのではないかと感じています。

福祉の仕事は「日常」です。どのようなスタイルがより望ましいのか、模索が続くことになるでしょうし、それが「日常」になるまでにはさらに時間を要するのかもしれません。

状況によっては、利用者の皆様、御家族の皆様、関係者の皆様には「日常」とは違う制限等にご協力をいただくことがあるかもしれません。何卒ご理解を賜りますようお願いいたします。



活動の紹介

なかしべつ地域生活支援センターの各事業所の活動などを紹介します。

今回は、児童通所事業所です。

○放課後等デイサービス とらいあんぐる

緊急事態宣言が解除されて分散登校が始まった際には、利用人数を減らしてソーシャルディスタンスを保ちながら受け入れをしてきました。徐々に生活リズムも安定してきてはいますが、現在もマスクの着用やうがい手洗い、手指消毒などの感染予防対策は徹底し「感染しない」努力を継続しています。子ども達の健康管理・安全対策には十分配慮しコロナウイルスだけではなく、夏の暑さとマスクによる熱中症への対策にも心掛けながら、水分補給や環境整備にも取り組んでいます。

今年の夏休みは例年のような行事を行うことはできませんでしたが、暑い日にはデッキに出て水遊びをしたり、かき氷や流しそうめんなど、子どもたちと一緒に今できる夏らしい遊びや活動を実施しました。

水遊びは暑い日が続いたおかげで、夏休み中に2回実施できました。水を張ったビニールプールに子どもたちは大喜び！！シャワーホースで全身に水を浴びる子、プールに入って水の感触を楽しむ子、足だけ水につけて涼んでいる子等水遊びを楽しんでいました。



かき氷作りはおやつの時間に合わせて実施しました。1人ずつ自分で氷を削ってかき氷作りを体験をしました。「どの味にしようか？」と悩んだり、ワクワクしながら作る子ども達の表情がとても可愛らしかったです。いちご、メロン、レモン、ブルーハワイの4種類をすべて氷にかけて「レインボーだよ！！」と嬉しそうに食べている子どももいました。

流しそうめんは、今回初めての試みでした。プラ段という素材を使いそうめんを流すコースを作るところから始め、試行錯誤をしながら当日を迎えました。水が流れるコースを前に「早く！早く！」「何が流れてくるの？」と子ども達は大喜び！

箸が難しい子はフォークを使って一生懸命そうめんやトマトなどを取って昼食に食べました。来年度の夏休みはコロナが落ち着き、今回の活動を行事として子ども達みんなで体験できるようにしたいと考えています。



また毎年2回行っている避難訓練。今回は地震を想定して実施し、事前にエプロンシアターを見ながら避難の方法を確認しました。低学年から高学年まで真剣な表情でシアターを見ながら、避難方法を学んでいる様子で「お・か・し・も（押さない・駆けない・しゃべらない・戻らないの頭文字）」の合言葉もしっかり覚えて、高学年の子ども達は意味などの説明をすることができていました。訓練が始まると、緊張した表情ではありましたが、職員の話聞いて素早く机の下に潜り込み、外に避難することができていました。その際も低学年のお友達を気に掛ける高学年の姿があり、とても頼もしく見えました。



今後については、社会生活自立も視野に入れた活動や経験、子供たちの思い出作りが沢山出来るような機会を提供していきたいと考えています。

○別海町児童デイサービスセンター「にっこっ」

緊急事態宣言が解除されて3カ月が経過しましたが、依然コロナウイルスへの警戒は怠ることができません。

デイを利用する子どもたちにも、来所時の検温の実施や家庭での体調の観察について引き続き注意をしていただいています。また子どもの利用が終わる毎に遊具等の清拭や消毒を行いながら、予防に努めています。幸いにして別海町ではまだ罹患者は出ていないようですが、これからも引き続き警戒をしていかなければなりません。

そんな中でも、子供たちは元気です。毎日「おはよー！」等と声を掛けられると、逆に私たちが元気をもらっています。

夏休みが大幅に短縮された中、最終日の8月17日（月）に放課後等デイサービスの子ども達を対象に、釧路のイオン昭和店へ外出行事を行いました。内容は、ボーリングと買い物です。事前にボーリング場へコロナ対策について確認をし、移動はソーシャルディスタンスを保てるように車2台に分乗しました。

ボーリング初体験の子どもが数人いて、初めてのボーリング場の雰囲気緊張しながらもボールの重さやレーンなどを確かめるようにそろそろと投げていました。ガターが出ないようにガードを上げてくれたこともあり、ピンが倒れると子ども達の歓声が上がっていました。

ストライクやスペアが出ると隣のレーンの人にまで報告したり、自分の点数と相手の点数を比べて勝負をしている子どももいて、とても楽しめていたようです。



ボーリングの後は、フードコートでの食事です。事前に家庭で昼ごはんのメニューを決めてもらっていたので注文はスムーズでした。食事の後に、買い物の体験をしました。買い物はできるだけ一人でしてもらい、職員は遠巻きに見守っています。なかなか店員さんに聞くことができない子どもや、恥ずかしそうにしながらもしっかりと「～ください」と伝えられた子どももいました。

今後の生活で必要になってくるような経験が少しでもできるような機会を、これからも沢山作っていきたいと思います。



とびっくす

コロナウイルスがもたらした影響により、従来の私たちの生活は大きく変化することを余儀なくされました。「新しい生活様式」が発表され、私たちの意識や実際の行動の中で多様な変化が求められています。

なかしべつ地域生活支援センターにおいても、様々な対応をしています。前項の活動紹介でも触れていますが、検温や手指消毒、使用後の清拭・消毒、マスクの着用、ソーシャルディスタンスの確保など、利用者や保護者と直接接する機会が多い仕事ですから、強い意識を持って予防や感染防止に努めなければなりません。

そんな中、一躍注目されたことの一つに「WEB会議」があります。

ここ最近スタンダードになってきていますが、このコロナウイルスでの緊急事態宣言中に一気に認知が広がりました。また実際にWEBでの会議や研修会がどんどん増えていると感じます。

なかしべつ地域生活支援センターでも同様に、WEB会議を積極的に取り入れています。その利便性は目を見張るものがあります。しかしそれが全てを代替できるものではないことなど、使えば使うほどに実感してくることもあります。

そこで当センターで開催したWEB会議について、「実際に行ってみて感じたこと」やメリット・デメリットなどを職員に聞いてみましたので、その結果をお知らせしたいと思います。

【メリット】移動時間や会議時間の効率化ができる。

【デメリット】雰囲気や空気感が伝わりづらい。

大きくこのような意見にまとまりましたが、恐らく当センター以外でも同様の意見が多いのではないのでしょうか。なかしべつ地域生活支援センターの事業所は、根室市・別海町・中標津町と広域に渡っていますので、参集するための移動時間はどうしてもネックになります。また会議の時間も、実際に集まって実施する会議よりも短縮される傾向があります。しかしその反面、報告や確認などはスムーズですが意見交換や議論においては、対面の会議よりも難しいという意見もありました。またパソコンの扱いが苦手な人には、WEB会議のシステム自体の理解が追い付かないこともあるかと思えます。

今後、これが当たり前になっていくことを想定しながら、回数を積み重ねていくことで対面と同様な「議論」ができるようになればとの期待をしながらも、まずは場数を踏んで経験値を上げること。また対面の良さや必要性、予防対策の効果等といったことを踏まえながら、新しい技術やツールそして考え方を適切な度合いで導入して行ければと思います。



あとがき

『ふれあい』つうしん、第14号の発行となりました。今後とも、より一層地域のみなさまに貢献できるようにがんばってまいります。

併せて、なかしべつ地域生活支援センターホームページも是非ご覧ください。

(http://www.dofukuji.or.jp/facilities/nakashibetsu_shien/)